

三十一 他山の石

猛暑に負けずお元氣にお過ごしのことと存じます。小生は、イチジクなど水をほしがる果樹や野菜の世話に汗を流しています。さて、先だつて興味深い体験をしました。それはこちらにはねかえつてくる問題を含むことがらです。小生の考えがどのくらい妥当か聞いていただくために、考えを巡らせながら語ってみます。いつものようにとりとめがなくなることを恐れますが、がまんづよい貴兄なら聞いてくださるでしょう。

三十代の中国の友人をわが家に招待して、山口県を案内しました。関門橋のたもとから海峡を見下ろして、そこであつた二つの戦争、壇の浦の戦いと四国連合艦隊との戦いを説明し、ここで戦闘はなかつたけれどもう一つの戦争にかかわる対岸の春帆楼を指さしました。それから山口で、コロンブスのカリブ海への航海以前に建てられた瑠璃光寺五重の塔と、中国へ渡航して絵画を勉強した雪舟のプランになる常栄寺の庭を見物しました。翌日は萩へ。城址や幕末の事跡を訪れて、歴史に関心のある彼に、昨日の話に補足するように、日本の近代化の苦闘をかなり解説しました。彼は、近代になってどうして中国と日本の進

展に差が生じたのか考えるふうでした。小生は、日本の封建制の中央集権的な中華帝国との違いを説明し、動きが生じやすい分権体制とそこで主導的な機会をとらえた人々の行動のしやすさなどが一つの要因だったと思うと話しました。この体制の違いを、日本でもよく理解している人は少ないのですが、彼は知っていなかったようです。

次の日は本州西端の海を見ながら下関へ。唐戸市場ですしを買って、海峡を眺めながら昼食。行き交う船のなかに中国船もあるのに気づいたようです。物流で今の中国の勢いを知ることができます。十九世紀後半の関門海峡では欧米船が目立ったことでしょう。最後の見学場所が春帆楼。日清戦争の講和条約が結ばれたところです。全権大使の総理大臣伊藤博文と清の全権大使李鴻章の写真や書などが展示してあります。交渉のテーブルが再現され、条約文の重要な条項が大きく示されています。最初からこうだったのか知りませんが、比較的客户的な展示の仕方だと思いました。もっとも、日本人には気づきにくいけれど、どの国でもあるように、戦勝者の側の語り口が潜んでいるかもしれません。

小生は、上海からの客人に、上海交通大学の東大門を入ったところにあるモニュメントの話をしました。下関Ⅱ馬関条約の翌年、清の高官たちが光緒帝に提出した上奏文の全文を、身の丈を越える石版を並べて刻んだものです。その上奏文は、日本の諸藩が西洋列強によって馬関や鹿兒島で苦杯をなめたあと青年を西洋に派遣したことに触れ、清でも人材

育成の必要を説いて大学の設立を求めています。そこに登場する馬関の名は、前年の苦い敗北を想起させ強い効果をもったことでしょう。上奏文によって設立された大学の後身が建てたモニュメントの前で、小生の身がぞくつとしたのは、百年以上も前に蒔かれた種が今花開いたと思ったからです。中国は、購買力平価で評価する経済力で、まもなくアメリカ合州国を追いぬくそうです。国家百年の計とはこういうことを言うのでしょうか。

その馬関にある春帆楼のわきから、李鴻章道と名づけられた小道が山の斜面に続きます。困難な交渉をしていた李鴻章は、日本人に銃で撃たれてけがをし、その出来事のあとは、春帆楼わきの小道を通って宿舎の寺から往復したのだそうです。外に出た友人は、予習していたのでしょうか、李鴻章道を奥の方まで独りでたどりました。相手の全権大使は狙撃されてけががすみましたが、こちらの全権大使は、のちに中国東北地方で狙撃されて命を落としました。日清戦争で支配権を争われた朝鮮は、清の冊封体制から脱して大韓帝国になったもののついには日本の統治権に服するようになり、初代統監に就いた人が民族主義者に撃たれたのです。二人の全権大使の狙撃は、帝国主義に染められていった東アジアの歴史の一コマですが、それはまだ十分に過去の出来事になりきっていません。

日本に滞在中の友人は、感慨深げに見物し、世話になっている日本の人たちと歴史を話

題にすることはないが、あなたとなら率直に話せると自分の考えを語りました。自分の習ったところでは、中国は日清講和条約によって日本の沖縄領有を承認したはずで、条約の条項にあるはずだが、展示されている条文にそれがないのがおかしいと。それまで日本は沖縄をコントロールしていなかったというのが彼の理解でした。小生は、琉球王国についての出来事、すなわち、一六〇〇年代初頭以来の鹿児島藩の実質的な支配と、一八七〇年代に明治新政府が琉球王国を廃して日本国に編入したことの二つを挙げ、実態的なコントロールが古いことを話しました。

その晩、関門トンネルを歩いて渡った友人が無事に帰り着いたか尋ねるメールで、日清講和条約中の澎湖諸島の地理について小生が混乱していたことを追伸に添えました。するとお礼のメールが来て、中国の歴史書は甲午の戦争で琉球を失ったとは書いていないと修正し、しかし、日本政府が全琉球を支配したのが戦争のあとだというのは事実だと書いていました。小生は、factという不用意な言葉を見過ぎで、改めて鹿児島藩の侵攻と明治政府の琉球併合の正確な年を告げ（琉球人に同情するけれどもというコメントを付けたのですが）、学ぶ者は、中日両政府の手になる文書ではなく客観的に書かれた歴史書を読み、現実起きた出来事を知った上で自分の意見を述べるべきだと書きました。友人は、英文の Wikipedia を読んだらしく、歴史上の出来事についてのわたしの説明に同意する、

という返信を送ってきました。小さな論争は終息したものの、すぐに、小生の意見はこちら側にも跳ね返ってくると思われました。

鹿児島藩は「税」を取り中国との交易も牛耳って琉球を実質的に支配し、幕府もそれを承認しながら、琉球王国は存続しているという形式がとられました。ここには、明・清と軍事的な事をかまえたくないという幕府側の恐れがうかがわれます。琉球は李氏朝鮮と同じく中華帝国の冊封体制下にあつて使節を中国に送っていました。琉球の使節が、朝鮮の通信使のように、江戸にも来るといふやり方がとられました。ところが日米和親条約の年に、アメリカ合州国のペリー提督は琉球とも修好条約を結び、国際的に琉球王国が存続しているという外交事例となりました。明治政府は、それを解消するために段階をふんで併合へと進んだのです。琉球編入は諸外国に通知されたようですから、結局、欧米列強は日本の実態的な支配を承認したことになります。しかし清王朝としては、承認を公言したくなかったでしょう。その心理が、琉球への宗主権を失ったのは日清戦争のあとだという中国人の認識を生じさせた、と思われます。

歴史をたどってみると、沖縄(そして尖閣諸島)が日本「固有」の領土だと主張する日本政府の言い方が、それほど賢明ではないことが分かります。国の領土は、歴史上、どこで

もいつでも多かれ少なかれ変動しました。日本自体、東北で国境は変化しました。『旧唐書』が、八世紀の日本王朝について「東界北界は大山ありて限りをなし」と書いています。実際、奈良朝初期の国制で東北地方は単に陸の奥とされ、「柵」と呼ばれる軍事前線基地が北上中でした。その歴史は、十九世紀後半まで残った征夷大將軍という称号に刻まれています。戦国時代から日本国住民が移住し始めた蝦夷（北海道）は、南端の松前藩を別にして、幕藩体制の下でほかの正規の国とは違う例外的な地域でした。こういうことを言っても小生は、東北地方と北海道が現在の日本の欠くことのできない構成部分だと考えます。異論をさしはさむことができるのはアイヌの人々しかいないでしょう。

ほかの国々でも似たような歴史があると思います。中国を例にとってみましょう。東では、海に隔てられた列島と距離的に遠い朝鮮半島やヴェトナムに対し、安定的な冊封関係に落ち着きました。南と西では「積極的政策」つまり拡張策をおし進めました。今日では南部は中国の一部と言えるまでになっていますが、いまだに自他ともに少数民族と考える人々が住んでいます。西方は、シルクロードの回廊を中心に自分を漢族と考える人々がいるでしょうが、甘肅省を除き、絶対的多数ではありません。交流の深かった北では、北方の住民が中心部に流入しました征服王朝が支配して逆に同化することが続きました。清朝の出身領土である東北部は、今では中国の一部という見方が一般的でしょう。しかし、清朝

になってからの西部領土と内モンゴルは、歴史的な日が浅く、文化的にも宗教的にも差異が明らかで、民族問題がくすぶっているのは周知のことです。中国の国制は一体的な共和国で、解体した旧ソヴィエトのような連邦国家ではありません。中華帝国伝来の朱子学の大義名分論も幅をきかせます。これらが、領土問題について中国の姿勢を縛り、台湾に對してだけでなく、東方政策に影響しているように見えます。

しかし、見方によつては、中国は、漢の高祖や宋王朝以来、北方の強敵に現実的な対応をしたと考えることもできます。そういう地政学的な理解に収まる事件が最近起きました。二〇〇八年、かつて中国・ソヴィエト間で戦闘までした国境のウスリー島を、折半するという妥協が成立しました。これを見て、愚鈍な小生は思います。無人の島々について、日中兩國が穩便に事をおさめることはできるはずだ、と。他方のロシアについても、一部とはいえ返還に言及したことがあるのだから、北方の島々について妥協の道があるだろう、と。

ヨーロッパの国境問題を知れば、東アジアの大義名分論に固執しすぎて緊張を高めることの愚かさが分かります。ヨーロッパは近世以後もパワー・ポリティクスでした。フランスとドイツがアルザス・ロレーヌ地方を何度も奪いあつたことは誰もが知っています。

第一次と第二次の世界大戦で区切って、前後三つの時期のヨーロッパの国境線を比べれば、その大きな変化に驚かざるをえません。とくに、ドイツより東で国々の国境が大きく西に移動しているのに眼を奪われます。二十世紀になってからも、戦争の勝敗が国境線を引き直させたのです。そのヨーロッパ人が、記憶に新しい国境の変更を認め合って、連合をつくる道に進んでいるのはとても教訓的です（連合議会はアルザス・ロレーヌに在ります）。ずいぶんタフですね。戦争は、彼らの考え方を変えるほど悲惨だったのです。同じく戦争の悲惨を味わった日本人は、ヨーロッパ人のような強靱さを学んだでしょうか。

最も重要なのは、宿命的な仇敵だったフランスとドイツが互いに二度と干戈を交えないと決意したことです。この決断がヨーロッパを連合の方向に導きました。第二次世界大戦で敗北したドイツは、ドイツ騎士団領以来の東の古い領土（カントの生まれた都市まで）を失い、千五百万人以上の追放者を受け入れました。そのドイツがこの「堪えがたき」新しい国境を変更する意図のないことを示して、ヨーロッパ連合は東方まで拡大したのです。そして現在、ヨーロッパ連合の中心的な国はドイツです。大義を打ち立てるなんという知恵でしょう。愚直な者をうならせずにはおきません。

ひるがえって日本のことを考えてみます。日本は、ドイツと同じく敗戦国です。国際連

合と訳されている組織は、枢軸国のドイツと日本に対する連合でした。五つの常任理事国は日本に対する戦勝国です（中国に対しても敗れたことを忘れてはいけません）。日本の戦争は国民にとっても無惨でしたが、住民のいた北方の島々を例外として、ドイツのように領土を失わずに済みました。ヨーロッパの例を見れば、ロシアがアジアでは妥協の姿勢を残していることは幸運なのかもしれません。現在二国と論争になっている無人の島々について、共通の文化圏の人間がヨーロッパ人に遅れをとってよいでしょうか。少なくとも、子供たちに鋭い対立心を煽らないような配慮をする必要があると思います。

沖縄のことに戻りましょう。沖縄すなわち琉球は、奈良朝以来の日本の固有の領土ではなかった、日本に組みこまれたのが実質的には十七世紀初頭、国際法上正式には十九世紀後半のことだという認識が不可欠です。十八世紀初頭に連合王国に統一されたスコットランドが最近独立を問うたことを考えれば、日本でも沖縄の問題をおさなりにしてはいけません。国内で唯一戦場になって十二万人を超える住民が犠牲になり、二十五年以上もアメリカ軍に占領されたことを思い起こせばなおさらです。米軍は奄美諸島も占領しました。そこは、鹿児島藩が侵攻したとき直轄領にし、鹿児島県に属するようになったところです。琉球王国と修好条約を結んだことのある米国は、その歴史を知った上で占領したのです。状況次第では占有し続ける意図があったのかもしれませんが。歴史的な経緯は、敗戦時の日

本側にも沖縄の不幸に痛みを感じなかった人たちがいた疑いを抱かせます。世界の政治情勢から日本に返還されたことは不幸中の幸いでした。沖縄の人々の多数が日本復帰を望んだことも肝に銘ずべきです。中国が異を唱える尖閣諸島の問題を、米国との軍事同盟に従属することによって安心することはできないでしょう。第二次世界大戦後、米国側が中国国民政府に琉球への領土的な意向を打診したという話を聞きます。沖縄の歴史を知っている米国は、尖閣諸島の帰属問題について局外中立を公言しました。この問題で中国と事をかまえてまで日本の味方をするとは考えられません。幻想を抱いてはいけません。われわれは、前回の選挙で選ばれた沖縄県知事が、慎重な言葉づかいで米軍基地の問題の解決を求め、日本の中で義を追求しているのに敬意を払うべきだと考えます。

中国の友人との対話がきっかけで、政治に疎い者が領土問題のようなむずかしい問題を考えてしまいました。貴兄はあきれておられることでしょう。ともあれ、他山の石とは言うけれど、難問を解きほぐすのによい石を他山に探すことをためらう必要はないと思います。す。やっかいな挟まり物を玉にする目にも習わなければなりません。

追伸

六月にNHKの番組「沖縄戦全記録」を観ました。この戦争の無惨にただ息をのむばかりでした。それについてなまじの言葉は用無しです……。番組の主題はここで考えたことと直接関係するわけではありません。しかしその無惨はほかならぬ沖縄で起きたのです。映像の背後に琉球＝沖縄の歴史がわだかまっているのがわたしには見えました。もうすぐ国会で戦争放棄の憲法を葬る法律が成立しようとしています。二〇一二年の総選挙がこの道への岐路だったのですが、わたしたちの社会が一步一步病んでいく状況に歯ぎしりしています。この国は、憲法に違反する法律でさえつくる道理のない国になりさがったのです。人間の歴史が目的をもたず裁く者がいないとしても、人と同じように国も倫理を問われます。諸外国から一定の顧慮を受けていたはずの基本姿勢を転換したら、世界のせめぎあいの中で相応の報いを受けることになるでしょう。世界の歴史はそれを教えていると思います。

二〇一五年、敗戦七十年目の八月